

(3) 農薬の上手な使い方

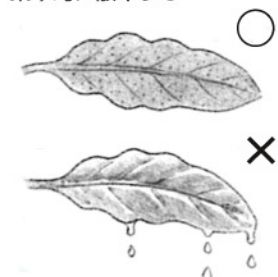
農薬（混用順番）

作業はゴム手袋をはめる



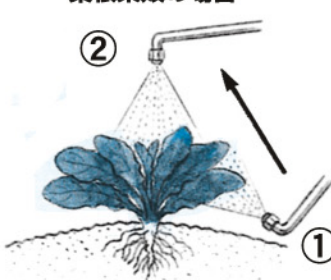
殺虫剤

害虫のいるところをねらって集中的に散布する



薬液が葉にまんべんなく霧状に付着するように散布する。流れ落ちるようではよくつかない

葉根菜類の場合

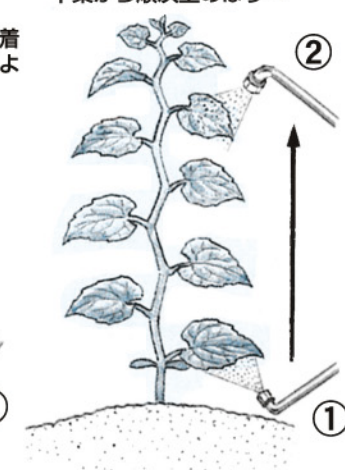


殺菌剤

まず葉裏にかけ、あとから表面にさっとかける



果菜類の場合
下葉から順次上のほうへ



多くの野菜はかならずといってよいほど病害虫が発生し、放任しておくと致命的な被害をうけることも少なくありません。

作づけする前に、注意すべき病害虫の種類や発生の際候、出る時期などを心得ておき、常に観察を怠らないことが大切です。

病害虫は決して一斉に出るのではなく、はじめ特定の株、葉に出て、それが何日かすると全面に広がりますので、初発生の段階でいち早く薬剤を使用することが、最も効果的です。また、薬剤の使用量も少なくてすみます。

薬剤によって適用病害虫と作物、濃度、使用可能な回数、収穫の何日前まで使用できるかなどが異なりますので、説明書をよく読んでまちがいのないよう十分注意しましょう。また、説明書は捨てないで保存しておき、忘れたらまた読み直し、初心にかえて注意を守ることが忘れないでください。

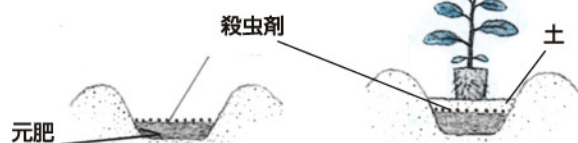
水和剤、乳剤の使い方

散布に必要な水量に薬剤を入れ、よく混合して使用します。必要量は野菜の種類や発育段階によって大きくちがいますが、生育ざかりのキュウリ、トマトでは1株当たりおよそ100～200cc、キャベツ、ハクサイでは約30～50ccくらいと考えてよいでしょう。

散布に当たっては噴霧器の圧力を十分にかけ、病害では病原菌の最も侵入しやすいところ、病斑の出はじめているところに重点をおいて散布します。その部位は雨によって土がはね上がりやすい下葉の裏であり、病害によっては茎の基部などです。噴霧口を上向きにして下葉の裏をねらい、しだいに上葉に向かい、最後に全体の葉の表面にさっとかけるようにします。このとき注意すべきは、細かい霧が葉の全面にまんべんなくついている状態が好ましく、水滴がすぐにしたり落ちるようではかえって付着性が劣るということです。

殺虫剤のまき方

元肥を施してから溝の中にばらまく

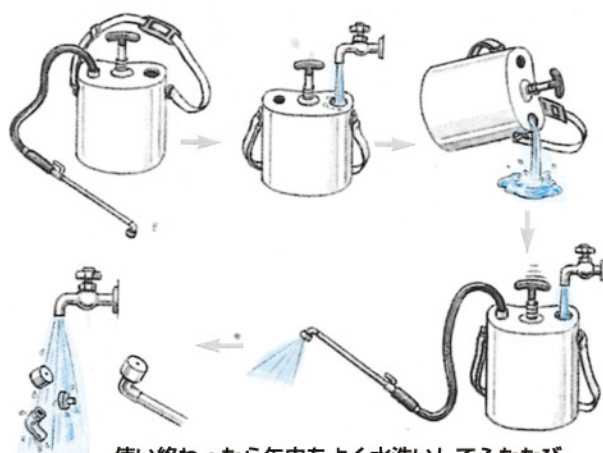


3~5 °覆土してから植えつけ、または種まきをする

株のまわりに点々とばらまく



噴霧器の保全



使い終わったら缶内をよく水洗いしてふたたび水を入れ、ノズルをはずして水を出しよく洗う。ノズルも分水盤をはずしてよく水洗いする

農薬の保存場所



害虫に対しては虫が発生したら、その部位（おもに葉裏）をねらって重点的に薬剤を散布します。ダニやアブラムシ類などは、1回の散布では効果が出ません。これらの害虫は世代の交代が早く、またすぐに成虫が出て被害を及ぼしますので、4~5日おきに2~3回の散布が必要となります。

また、ネギ類、キャベツ、ブロッコリーの仲間のように葉がろう物質で覆われているものは、殺菌剤、殺虫剤ともにつきにくいので、展着剤を加えることを忘れないようにします。

土壌施用殺虫剤、誘引殺虫剤の使い方

土壌中や根の表面、茎の中にすむ害虫や、アブラムシなどを予防するために使用する浸透性の殺虫剤は、粒状になっているので、植えつけ前の溝の中や、生育初期に株のまわりに散布し、土と混ぜておきます。

ナメクジなどの誘引殺虫剤は夜間出回る被害部付近の地面に、モグラの忌避剤は行動する通路部分に置いて効果をねらいます。

噴霧器の保全と農薬の保存上の注意

薬剤の多くは金属を腐蝕させたり、ゴムパッキンなどを劣化させやすく、噴霧器は保全管理がまずいと意外に傷みやすいものです。使い終わったらすぐに水洗いします。ノズルを取りはずし、圧力をかけながら強く水を出して完全に水がきれいになるまでよく洗浄します。ノズルの分水盤も取り出して掃除しておきます。なお、ノズルは摩耗して霧の粒子が粗くなるので、適宜取り替えることも必要です。

家庭菜園で使用する1回当たりの農薬の量は少量です。そのため容器を開封したままの農薬を物置などに保管することになります。使い残りはしっかり蓋をして日の当たらない、涼しい場所に置けば1~2年は十分効果が持続しますので、大切に保管します。

保存に当たってはかならず子どもの手の届かない場所を選びます。また、使い終わった容器も所定の方法で処分し、子どもの遊びに使われたりしないよう厳重に取り扱います。